特攻を見送る写真の原本調査

坂元　恒太

はじめに

本稿は、筆者が紀要第三号において考察を行った「特攻を見送る写真に関する考察」（以下、「前回拙稿」）[注1]の追録として、前回拙稿では未調査であった写真原本の実見調査について報告するものである。

調査対象は、昭和二十（一九四五）年四月十二日に毎日新聞社特派員が撮影し四月十七日付け同社朝刊記事にて報道された一枚の写真である。前回拙稿では、この写真は戦中当時にはさほど大きく取り扱われたわけではなかったが、戦後に同新聞社が編集した出版物に大きく掲載されたことを契機に全国的に知られるようになり、その後も様々な出版物やメディアに繰り返し用いられたことで、この写真が特攻隊を見送る象徴的な写真として定着していったことなどを論じた。写真が撮影されてから戦後の認知過程、被写体となった女学生らの証言など、写真の空間軸と時間軸に想像力を傾けて考察を試みたが、写真原本を実見できてはいないという問題があった。

写真原本の所有者である毎日新聞社への打診は、令和二年十月から行っていた。同年十二月には調査訪問の内諾を得てはいたが、コロナ禍のため同社への訪問を自粛せざるを得ない状況が続いていた。それから約一年経過した令和三年十一月から同社関係部署と再調整を重ね、同年十二月に同社大阪本社を訪問する機会をいただいた。訪問前には筆者は、スクラップ帳に貼り付けられた紙焼き写真の存在のみを写真原本として想定していたが、実見調査の結果、それのネガが存在することを知り、さらに関連情報を得ることができた。以下、調査成果を報告する。

知覧特攻平和会館
写真の無断使用を禁止します。

写真１　戦史資料室の展示風景
（左から証言映像，写真，日記，校章）

知覧特攻平和会館
写真の無断使用を禁止します。

写真２　南九州市指定文化財
なでしこ隊「特攻日記」

一．調査に至る経緯

筆者は以前、南九州市教育委員会文化財課に勤務しており、平成二十七（二〇一五）年に前田笙子筆なでしこ隊「特攻日記」の文化財指定事務に携わった。その際、日記にある「パチリ…後を振り向くと映画の小父さんが私達をうつして満足している」と描写された記述がこの写真であることを知った。その後、人事異動により平成二十九（二〇一七）年から知覧特攻平和会館勤務となり、平成三十一（二〇一九）年の戦史資料室リニューアルに関わることになる。そこで日記と写真、日記を書いた人物の証言とを展示する作業に関わった際、歴史を検証する上で原本を実見しておく必要性を感じた。そこでＷＥＢ検索により、毎日新聞社が運営するデジタル写真データベース「毎日フォトバンク」の中にこの写真が含まれていたことを知り[注2]同社へ問い合わせた結果、大阪本社に原本が保管されていることを知るに至ったのである。

二．調査成果

（1）毎日新聞社大阪本社訪問

・調査日　令和三（二〇二一）年十二月二十七日
・調査地　毎日新聞大阪本社（大阪府大阪市）
・調査者　知覧特攻平和会館管理係主任主査（学芸員）坂元恒太
　　知覧特攻平和会館管理組合語り部　桑代照明
・調査対象　毎日新聞　昭和二十年四月十七日記事掲載写真の原本
・調査内容　スクラップ帳に貼られた紙焼き写真及びネガの閲覧

筆者は、訪問前にはスクラップ帳に貼られた紙焼き写真の存在を想定していた。というのは、毎日新聞社が編集した『別冊一億人の昭和史　日本の戦史・別巻4「特別攻撃隊」』（毎日新聞発行、一九七九年）（筆者注：以下、『一億人の昭和史』）に掲載されている、複数の写真が貼りつけられたスクラップ帳の見開き写真を見ていたからである（六～九頁）。前回拙稿でも引用しており重複するが、頁下には、

「色あせたアルバムの中には　特攻関係の二冊が残されている　毎日新聞社の従軍記者たちが残した血と汗の結晶である（六頁下）」
「軍の検閲の目は光る　戦時下から今日まで　ずっと守りつづけた報道の記録　すでに逝ったカメラマンも多い（九頁下）」

という説明書きがある。そのため、調査対象の写真原本も同様の資料の中に収められていると推測していた。

大阪本社へは、令和三（二〇二一）年十二月二十七日の午後一時半に訪問し、五時半まで滞在した。大阪本社において訪問受入を担当してくださったのは、編集局情報調査部長の山田泰正氏。原本写真等の閲覧に関しては編集局アーカイブセンター副部長委員の金子裕次郎氏と、知的財産ビジネス本部アーカイブセンター大阪駐在の佐々木博子氏に便宜を図っていただき、情報調査部アーカイブ御担当の大塚哲也氏からは報道写真の保管方法や関連図書の御教示を得た。また、調査の様子は社会部副部長の山田泰蔵氏、記者の宮川佐和子氏から取材を受け、翌日の朝刊（全国版）にて報道された[注3]ことも付記しておきたい。

①スクラップ帳に貼られた写真原本

写真原本は、『一億人の昭和史』に掲載されていたものと同様にスクラップ帳に貼られていた（写真3～6）。スクラップ帳は、『一億人の昭和史』では二冊とされていたが、現在は一冊に合本されていた。調査対象である写真は、冊子の比較的前半の方に位置し、「振武隊」という見出しタグのついたあたりの頁に収められていた。今回の調査は、毎日新聞社から許可された条件の範囲内での閲覧のみであったので、調査対象の写真が貼られていた位置関係のイメージを筆者のスケッチメモから起こした模式図で示す（図1）。

金子氏の御教示によれば、スクラップ帳は、ページが途中で遡ることと目次が二箇所あることから、元々二冊あったものを一冊にまとめた物と考えることができるという。部隊ごとにまとめて写真が貼られているようである。

スクラップ帳を含めた戦時中の写真資料等の書誌情報は、毎日新聞社が外部研究者と共同研究を行う計画があるようである。今後、新聞掲載写真や、戦後の出版物の写真説明などと比較検討することで、歴史的価値付けがなされ、より詳細なことが明らかになると期待している。

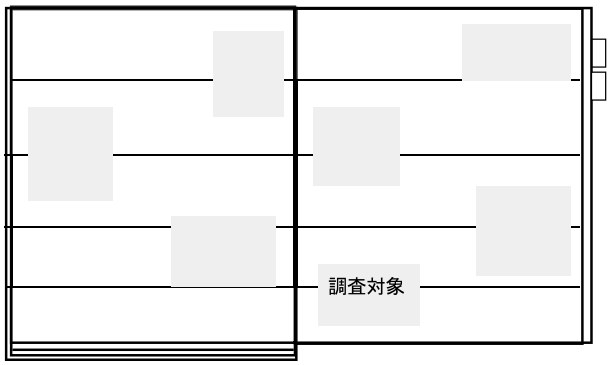

図１　スクラップ帳に貼られた紙焼き写真の模式図

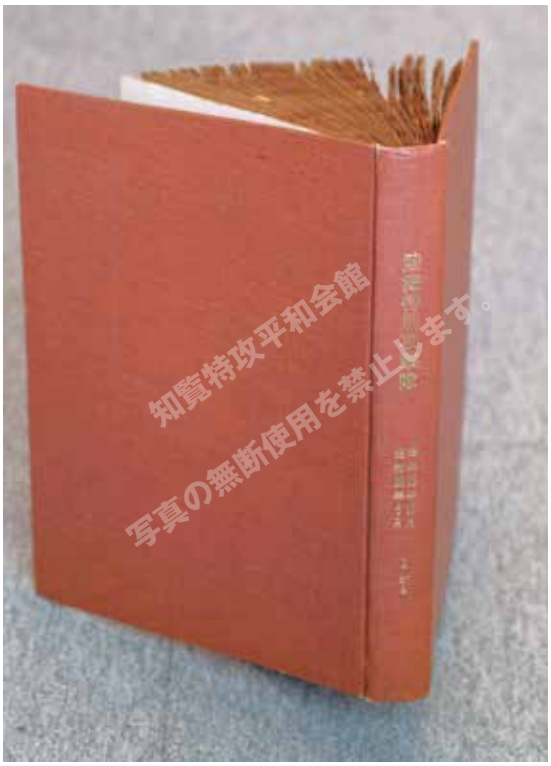
知覧特攻平和会館
写真の無断使用を禁止します。

写真３　スクラップ帳外装（毎日新聞社提供）
縦282㎜×横213㎜×高さ34㎜（毎日新聞社計測）

知覧特攻平和会館
写真の無断使用を禁止します。

写真４　閲覧風景（毎日新聞社提供）

知覧特攻平和会館
写真の無断使用を禁止します。

写真５　スクラップ帳近景（毎日新聞社提供）

知覧特攻平和会館
写真の無断使用を禁止します。

写真６　スクラップ帳に貼られた紙焼き写真と文字情報（毎日新聞社提供）

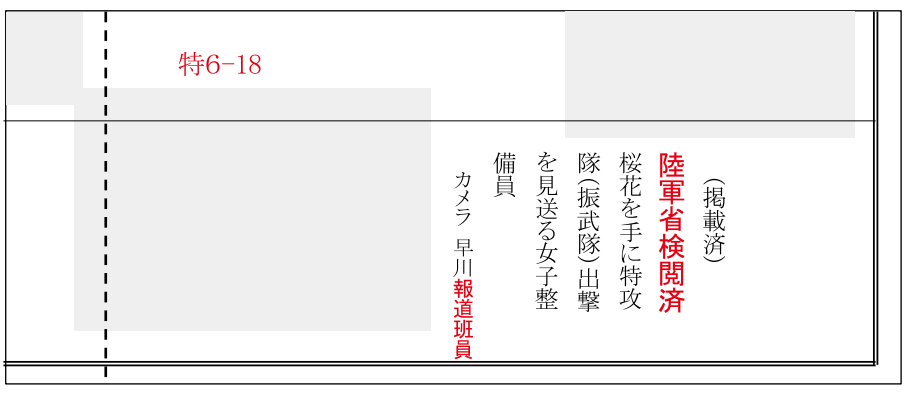

図２　写真６模式図

※対象写真は、見開きの右側の頁、下段にはられている。写真の左側部分には、スクラップ帳を閉じた際の折れジワが生じている。昭和20年４月17日記事では、この部分でトリミングされて掲載されていた。写真の左端は、意図的に切りとられている。

表１　写真原本の文字情報一覧

	記載事項	記載の方法
文字情報Ａ	特６-18	赤字・手書き
文字情報Ｂ	（掲載済）	赤字・手書き
文字情報Ｃ	陸軍省検閲済	赤字・ゴム印
文字情報Ｄ	桜花を手に特攻隊（振武隊）出撃を見送る女子整備員	黒字・手書き
文字情報Ｅ	カメラ 早川**報道班員**	「カメラ　早川」は黒字・手書き，「報道班員」は赤字・ゴム印

スクラップ帳の閲覧により、昭和二十年四月十七日の毎日新聞記事に掲載された写真の原本が貼られていることを確認し、そこに記された文字情報を知ることができた（写真６・図２）。

文字情報には、手書きの黒字と赤字の文字と、ゴム印で押された赤字があった。本稿では便宜的に、文字情報をＡ～Ｅに分類して整理する（表１）。文字情報Ａは、写真の整理番号であり、「特」は特攻隊を差すのではないかと思われる。文字情報Ｂは紙面に掲載されたこと、文字情報Ｃは陸軍省の検閲を受け合格したことを示している。文字情報Ｄは掲載紙面の写真説明と一致する。文字情報Ｅは撮影者の情報で、紙面の写真説明末尾に記された撮影者名と一致する。

紙面に掲載された写真と、写真原本の構図を比較すると、左端をトリミングして掲載されたことが判明した。紙面では、右から7人目の体がわずかにかかるのみである。スクラップ帳の原本写真の左端に折れシワが生じているが、丁度その部分から左側は紙面には掲載されていない。

②原本写真のネガ

さらに、写真原本のネガが存在することを御教示いただき、閲覧させていただくことができた。今回の調査では、謄写版の上にネガとネガを収める封筒を置いた状態での閲覧、観察することを許された。

ネガを収める封筒は、薄い紙で作られていた。目視観察のみであるが、素材は、知覧特攻平和会館収蔵資料にある陸軍罫紙や、現代の博物館等で資料保護に用いられる薄葉紙に近い紙質に思われた。封筒には、スクラップ帳と同様の文字が記されていたので模式図で示す（図３）。

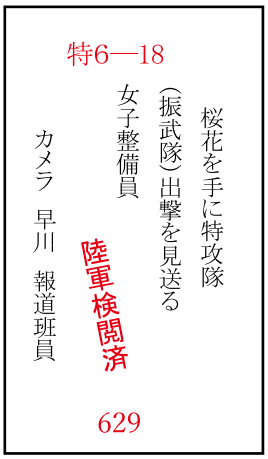

図３　ネガ封筒の文字情報模式図

ネガに関して、毎日新聞社の金子氏より次のような指摘をいただいた。

・フィルム全体のサイズは、横一〇四ミリ、縦七七ミリで、一般的に大判フィルムと呼ばれているサイズである。

・フィルム内の画面は断ち切りになっておらず白い縁取りがあるため、オリジナルネガから現像された写真を複写したものである。画面のサイズは横一〇〇ミリ、縦七四ミリで、複写した写真のサイズは横九五ミリ、縦六〇ミリである。

・コンタクト写真（スクラップ帳にはられた写真）のサイズは横九〇ミリ、縦六〇ミリで、ネガに写る複写写真より５ミリ小さい。

ネガには、画面左にもう一人の女学生が写っている。

つまり、このネガは、知覧で撮影されたオリジナルネガではなく、印画紙にプリントされた写真をカメラで撮影して作成した複写写真であるということであった。それではなぜ、複写写真を作成する必要があったのか。それを紐解く鍵として、当時の毎日新聞における報道写真の流れを金子氏に御教示いただいた。社史によれば、当時、オリジナルネガからプリントされた写真は、東京本社・大阪本社・中部本社・西部本社に各一枚、検閲用として陸軍省、海軍省、内務省情報局、許可された写真

の返却用に各一枚ずつの計八枚であったようである（注4）。

このことから、このネガは大阪本社に配布された写真を複写したものであると考えられるが、複写写真を大阪本社で八枚現像してから各所に配布したとも考えることもできる。

また、毎日新聞社大阪本社情報調査部に保存されている、当時のほかの出稿写真もいくつか見せていただいた。当時の報道写真は、被写体の輪郭を際立たせるために「筆」を入れることが一般的に行われていたそうであり、この写真にも「筆」を入れた跡があるが、ほかの出稿写真に見られる「筆」の形跡と、この写真とでは趣が異なっているようであり、大阪本社で筆を入れる前の写真を複写した可能性も考えられるという。

将来的に、八枚現像されたうちの一枚が、配布先のいずれかに現存していれば判別も可能になろう。今確実に言えるのは、知覧で撮影されたオリジナルネガではないということだけであり、推論の域を出ない。

③ネガの詳細観察

今回、ルーペ（十倍・二十五倍）を用いてネガを観察させていただいた。ネガの詳細観察の目的の一つは、写真に写る一式戦闘機「隼」の尾翼における部隊マークの有無確認であったが、観察したところ部隊マークは描かれておらず、「筆」で塗りつぶされた形跡もなかった。当時は軍の検閲の結果、軍事機密に関わる情報があれば修正指示が出されることがあったが、その場合はスクラップ帳に修正指示が記された（注5）。この写真に消された痕跡も、指示の記載もない。もともと、部隊マークは彩色されていない機体であったことを確かめられた。機上の特攻隊員の顔を観察したが、人物を判別するまでには至らなかった。

次に、「筆」を入れた痕跡を探したところ、いくつかの箇所に「筆」を入れて輪郭を強調した可能性がうかがえた。例えば、右から二人目の女学生が手に持つ桜花の花びらや、右から七人目の女学生が手に持つ小旗とその左隣の女学生が手に持つ旗がはためく様子を強調して白く塗られているように見えた。女学生の手の輪郭も、地面と区別をつけるため輪郭に陰影がつけられている可能性もあると金子氏から御指摘いただいた。機体中央に描かれた日の丸の白い輪郭の強調や、主翼下側の日の丸の周囲や機体の影、女学生の前方の地面にも「筆」が入っているように感じたが、門外漢である筆者の主観的な見立てであり、「筆」入れに関する結論は今後の専門家の研究に委ねたい。

（2）社史に記された戦中写真の来歴

毎日新聞社が保有するスクラップ帳やネガなどの戦中写真の来歴に関しては、社史（毎日新聞130年史刊行委員会『「毎日」の3世紀ー新聞が見つめた激流130年（下巻）』二〇〇二年発行）の「時代画した「一億人の昭和史」」の項に記されているので転載する。

「なぜ秘蔵写真なのか訳がある。

終戦の時、大本営から新聞各社にあてて戦前戦中の報道写真を焼却せよという命令が出たことがある。「訳」とはこの命令への対処の仕方にあった。

後に大阪の写真部長になる国平幸雄は終戦当時25歳だった。国平が回想する。

「8月15日から日を経ずして、大本営から焼却命令が出た。戦犯追放に使われる恐れのほか、撮影した者の責任も問われる恐れがあった。東京に本社のある各社は焼却処分せざるを得なかったが、毎日新聞だけは違っていた。当時、写真原稿の流れは大阪本社を軸にしていたからだ」

戦時中、外地の特派員たちが撮影した写真のオリジナルネガはすべて大阪本社に運ばれ、保管されるシステムになっていた。例えば上海戦線で撮影されたものは上海～長崎の連絡船にのせられ長崎支

局が門司へ届けた。空輸された場合は福岡経由で門司へ届き、現像された。急ぎのものは門司から東京・大阪・名古屋へ電送されたあと、生のネガは必ず大阪に送られてくる。通常は大阪写真部で現像、焼き増しなどの処理をした。ネガが到着すると、写真部員は通し番号を付け密着にした写真をスクラップに整理する。キャプションと撮影年月日、撮影者氏名もきちんとつけてである。中心となって写真の整理に当たったのは福島貞次郎写真部員だった。福島は丁寧な写真台帳をつくり続け、これが後々、「一億人の昭和史」編集の強力な援軍となるのである。

整理保管と同時に検閲用に４枚、東京・大阪・西部・中部の各編集局用に１枚ずつ、計８枚を焼き付けて列車便で送った。検閲用に４枚というのは、陸軍省・海軍省・内務省情報局に各１枚と、許可になった時、返却してもらうための１枚が必要だったからである。東京本社からの連絡で、許可になったものには「検閲済」、ならなかったものには「不許可」のゴム印を押し保管した。許可になったものでも写真の集成やキャプションの直しが赤字で書き込まれたプリントが東京から戻されてきて、これもファイルされた。

大陸からばかりでなく、マニラ、セレベス、インドネシアなどで特派員が撮った報道写真も大変な数にのぼった。

終戦当時、このスクラップブックが１５０冊、フィルムを入れた幅40センチ奥行き60センチの特注の木箱が１５０個近くあった。一つの箱に約２０００枚入るから大変な数のネガである。

大阪本社の地下室に保管されていたこれらの写真は、その後、梅田ホテルの地下に移された。５階建ての梅田ホテルは本社の隣にあって、部屋を宿直用に使うため毎日が借り切っていた。

44（昭和19）年、空襲が始まると、戦火を逃れるための疎開作戦が始まった。

梅田ホテルに保管されていたもののうち特に重要で貴重と思われる写真が選ばれ、30×40センチのブリキの箱に詰められた。それを写真部員らがリュックサックにつめて、何度も運んだ。行き先は当時社会部員だった藤田信勝（のち余禄の筆者）の疎開先である奈良県生駒郡富雄村二名（現在は奈良市内）の王龍寺だった。ここの住所は、ごく少数の人が知っているのみで、他の写真部員たちにも明かされなかった。

ポツダム宣言受諾直後、軍事裁判の証拠資料に使われることを恐れた軍部から「戦争裁判の資料になるものを焼却せよ」という命令が出た。しかし時の大阪本社・高田正雄写真部長は「特派員たちが命をかけて撮影した写真は社の貴重な財産であり、歴史の遺産である。焼き払うことなどできるものか」と守り抜く決断を下した。疎開先からひそかに写真を運び出し、旧大阪本社の地下金庫室に隠したのである。（三七六～三七八頁）」

（３）知覧特攻平和会館展示写真の来歴

知覧特攻平和会館の遺品室の一角に、この写真が展示されている（写真７）。戦時中に知覧で旅館や食堂を経営していた女性らの証言映像を上映しているコーナーの外側壁で、戦後に特攻おばさんと呼ばれた、鳥浜とめ氏の写真と並んで掛けられている。額縁内の写真は、台紙に貼りつけられており、写真の下の紙には、「特攻機の出撃を見送る学徒動員女学生（昭和２０年４月　知覧基地にて」と書かれている（写真８）。紙に貼りつけられているため、写真裏側を確認することはできない。

この写真は、開館当初から展示されてきた資料であると認識しているが、詳しい来歴を知る職員はいない。

今回の毎日新聞社大阪本社訪問で、情報調査部長の山田氏から紹介していただいた文献に、ヒントになる記述を見つけた。奥村芳太郎編『あゝ

写真７　写真の展示風景（左から２枚目）

航空隊＝続日本の戦歴＝』毎日新聞社、一九六九年発行）の「知覧　昔と今」の項に、知覧の特攻基地跡を訪れる紀行文的な内容があり、地元の知覧町役場を訪問した記述があるので以下、抜粋する。

「町役場をたずねたら、そこにある特攻隊の資料は毎日新聞社写真部員が当時撮影した、出撃の場面をつたえるたった一枚の写真だけであった。

「いくらかはあったのですが、戦後進駐軍がくるとき、そんな関係のものを持っていたら逮捕されるというのでみな焼いてしまったのです。いまは、この一枚の写真を寄贈してもらい、唯一の記念資料にしているのです」

そんなことを総務課長さんが話してくれたが、その一枚は市長室（筆者注：町長室の誤記）の壁に高くかかげられていた。数年前にやっとそこへかかげるようになったのだという。（九〇頁）」

本書が発行された昭和四十四（一九六九）年当時には、旧知覧町の町長室の壁に出撃の場面を伝える写真を飾っていたということが記されていた。現在の南九州市役所市長室には存在しない。旧知覧町長室に掲げられていた写真は、現在の知覧特攻平和会館で展示しているものではないかと推測する。知覧特攻平和会館の前身である知覧特攻遺品館が開館した昭和五十（一九七五）年か、会館が開館した昭和六十二（一九八七）年か、いずれかのタイミングで移管されたと思われる（注6）。

写真８　知覧特攻平和会館に展示されている写真（写真部分のサイズ　５５．７㎝×３４．８㎝）

その頃の町長は、昭和四十二（一九六七）年から五十（一九七五）年の二期務めた木原幸雄町長である[注7]。では、文中に登場する総務課長が誰なのか。木原町長のもとで総務課長を務めた人物に村永薫氏がいる。村永氏は、知覧町生まれで中央大学法学部で学び学徒出陣により相浦海兵団に入団、復員後に知覧町役場に奉職。町立図書館長や社会教育課長、総務課長を歴任し、退職後には知覧町文化財保護審議会委員を務めている。特攻隊への関心も高く、特攻隊員の遺書集である『知覧特別攻撃隊』を編集出版している[注8]。筆者の推論を重ねるが、町長室へこの写真を掲げるようになった経緯には、村永氏が関わっているのではないかと考える。『知覧特別攻撃隊』の裏表紙にも、この写真は大きく印刷されていることも、つながりがあるように思えてならない。

さて、知覧特攻平和会館展示写真と、スクラップ帳の紙焼き写真とを比較してみると、左端（右から8人目）の人物が写っているという違いがある。知覧特攻平和会館展示写真は、毎日新聞社大阪本社に保管されていたネガの構図に限りなく近い。ネガと比べると、左端の人物の体の左側が半身になって切れてしまっており、その左側からのぞいている旗を持つ隣の人物の手も、先端しか写っていない。額縁に収めるために、左端をわずかに切り取った可能性がある。

当館では、展示に利用する際に、額縁から取り出してスキャンしたデータを用いているが、機器の画面に全体が入りきらないために、やむなく左端をトリミングした画像を用いる場合が多かった。そのため、前回拙稿でも写真全体が掲載できていなかった。

（4）毎日新聞社西部本社訪問

大阪本社に保管されている原本写真を整理すると、

・紙焼き写真　…新聞掲載写真の原本（スクラップ帳にて保管）
・ネガ（複写）…紙焼き写真のネガ　（薄手の紙封筒にて保管）

という状況で、現時点では、大阪本社では元々のオリジナルネガの存在は確認できないということであった。そこで、戦中写真の保管状況を調べるために、令和四年一月十二日に毎日新聞社西部本社を訪問した。

西部本社の知的財産ビジネス本部局長委員、大久保資宏氏と、調査相談課の三宅氏に御対応いただき、保管されている写真資料のうち知覧基地に関連するものを閲覧させていただいた。ただし、これらは戦時中に現像された紙焼き写真ではなく、戦後に焼き増しされた写真をカードに整理したものであった。よって、昭和二十年当時に撮影されたネガや、現像された紙焼き写真は、現状では大阪本社に保管されているもののみであることを確かめることができた。

大久保氏によれば、近年、社内から『一億人の昭和史』シリーズで使われたネガフィルムが大量に見つかっている[注9]そうである。その中に、オリジナルのネガが含まれている可能性も残されている。

（5）特攻を見送る写真の掲載文献における写真説明の変化

大久保氏に、新聞記事と戦後の雑誌に掲載されている写真の説明文が変化している点について尋ねたところ、『一億人の昭和史』の写真説明は、当時の撮影者等に確認して裏を取って書かれたものであることを御教示いただいた。大久保氏が『新聞研究』へ寄稿した文章の中に、このことを説明している箇所があるので一部を以下に転載する[注10]。

「（前略）その一つが、写真データベースの基礎となる書誌情報である。それは「いつ・どこで・だれが・どんな状態で・どのように」撮影したのかが、写真の裏やネガフィルムのカバーなどにメモ書きされた「戸籍」ともいえるものだ。そもそも「いつ・どこで」が分からないような写真は、いかに構図が優れ、迫力があろうとも、歴史資料としての価値はない。

出版に際しては、写真やメモ書きなどについて、さまざまな角度から検証、裏取りがなされた。撮影した本人や、写っている人物を探しあてては内容を事細かに確認した。そんな薄皮をはぐような作業の連続が書誌情報を正確にするとともに後の代まで引き継がれ（後略）（五一頁）」

そこで、あらためて毎日新聞社の各出版物における写真説明を比較してみた（表2）。昭和二十（一九四五）年の記事では「女子整備員」とあるが、これは、上段に掲載された写真の説明文に「女子整備員も神風鉢巻締めて特攻機整備」とあることから、編集者が混同したと考えられる。あるいは、「女子学生」と表記しなかったのは何らかの理由があった可能性もある。その後、戦後二十年目に出版された『毎日グラフ』では、「土地の女学生」という表現に変わり、音や情景の描写が詳しくなっている。さらにその後の『一億人の昭和史』になると、「土地の女学生」という表現から「知覧高女3年生」と具体的な表現に変化している。さらに『決定版　昭和史』では、見送られる飛行機が「一式戦闘機隼」であることが付け加えられている。これらのことから、『毎日グラフ』の編集過程では現場にいた人物から得た情報をもとに説明文が構成され、『一億人の昭和史』、『決定版　昭和史』では、新たに得られた情報を軸に説明文が付されたことがうかがえる。

（6）撮影者、早川報道班員について

この写真が掲載された記事の写真説明の末尾には、「－いづれも早川報道班員撮影－」と撮影名の記載がされている。今回、金子氏の御協力により早川報道班員の御子息の早川巖氏にたどり着くことができた。

早川氏によれば、御尊父の早川弘氏は大正六（一九一七）年生まれで撮影当時は二十七歳であった。四十年程前に六十四歳で逝去されている。

表2　各出版物における写真説明の比較

刊行年	写真掲載文献	写真説明
昭和20（1945）年	毎日新聞　4月17日記事	桜花を手に振武隊出撃送る女子整備員
昭和40（1965）年	毎日グラフ臨時増刊　続日本の戦歴	機体の下に黒い爆弾がつるされていた　車輪をきしませながら彼らは列線を離れていった　土地の女学生が桜をふって見送った　目には銀色の涙がふきだしていた　クツのない素足にゲタをはいた女学生であった　二十年後の若者には信じてもらえない光景であった　機上の若者は静かに敬礼して去っていった
昭和54（1979）年	別冊一億人の昭和史　日本の戦史・別巻4「特別攻撃隊」	沖縄へ向けて出撃する特攻機に　桜の花を手に見送る知覧高女三年生たち　この人たちは知覧高女なでしこ会編で「知覧特攻基地」を出版した
昭和58（1983）年	決定版　昭和史	「散る桜　残る桜も　散る桜」ある特攻隊員が詠んだ句である　沖縄戦がし烈になると　九州の陸海軍航空基地から〝若桜〟が還らざる攻撃に次々と飛び立っていった　知覧基地で女学生に見送られて出撃する一式戦闘機」

毎日新聞社大阪本社に入社後、満州勤務を経て昭和二十年には西部本社勤務で門司に自宅があった。知覧での滞在期間はわからないものの、取材のための短期出張であったのではないかという。また、記事の冒頭に連名で記名のある村山報道班員とは家族ぐるみの付き合いだったそうで、二人は、記者とカメラマンという組み合わせで一緒に取材に赴くことが多かったようである。

毎日新聞社西部本社に残る、昭和二十年九月一日現在の社員名簿によれば、早川弘氏は、写真課に所属する十一名のカメラマンの一人であった（大久保氏の御教示による）。

まとめ

今回、毎日新聞社の全面的な御協力により、特攻を見送る写真の原本調査を行うことができた。新聞に掲載された写真の原本は、大阪本社に保管されているスクラップ帳に貼られていた。その原本写真のネガも保管されており、それは、オリジナル写真を模写したものであった。これらは、戦後に大本営から焼却命令が出されたにもかかわらず大阪本社金庫室に秘匿されたことで後世まで伝わっているものであった（注11）。

この一連の調査に加えて、知覧特攻平和会館で長年展示されてきた額縁に入った写真は、昭和四十年代における知覧町役場の町長室に「唯一の記念資料」（注12）として掲げられていた可能性が高いこともわかった。さらには、撮影者の早川報道班員の御子息から御尊父、早川弘氏のことについてお伺いすることができた。一方、報道写真における「筆」入れについては、今後の専門家による研究が待たれる。

筆者は、前回拙稿と本稿において、特攻を見送る写真を歴史資料として読み解くための作業を行ってきた。一枚の写真の検証としては可能な限りのアプローチを試みたつもりではあるが、全てを明らかにできたわけではない。将来、この写真を含めた戦中写真に関する研究が深まり、新しい知見が得られることを期待している。

末筆ながら、御尽力いただいた全ての皆様に心から感謝申し上げます。

〔注〕

注１　坂元恒太「特攻を見送る写真に関する考察」『知覧特攻平和会館紀要』第３号、知覧特攻平和会館、二〇二一年、一～三四頁

注２　毎日フォトバンクhttps://photobank.mainichi.co.jp/

注３　毎日新聞　令和３（二〇二一）年十二月二十八日付け朝刊（図４参照）

注４　毎日新聞130年史刊行会『「毎日」の３世紀ー新聞が見つめた激流130年（下巻）』毎日新聞社、二〇〇二年、三七七頁

注５　毎日新聞社編『毎日新聞秘蔵不許可写真』毎日新聞社、一九九八年

注６　知覧特攻平和会館に残る写真資料の中に、町長室にこの写真があったことを傍証する写真がある。昭和50（一九七五）年から四期町長を務めた塗木早美町長が、町長室で台紙に貼ったこの写真を手に、特攻銅像「とこしえに」の作者伊藤五百亀氏と、歌謡曲「基地の母」の歌手菊池章子氏に説明する様子が撮影されている。

注７　知覧町郷土史編さん員会編『知覧町郷土誌』知覧町、二〇〇二年、一〇一頁

注８　村永薫編『知覧特別攻撃隊』ジャプラン、一九八九年。村永氏の経歴は、同書の奥付けの記載を参考にした。

注９　大久保資宏「歴史を宿す「一枚」を未来にーデジタル化と地方紙連携進む毎日フォトバンク」『新聞研究』二〇二一年七月号（No.836）、五〇～五三頁

注10　前掲９　五一頁

注11　前掲４　三七六～三七八頁

注12　奥村芳太郎編『あゝ航空隊＝続日本の戦歴＝』毎日新聞社、一九六九年、九〇頁

（さかもと・こうた　知覧特攻平和会館管理係主任主査（学芸員））

写真９　早川弘特派員
（早川巖氏提供）

写真10　早川弘特派員
（早川巖氏提供）

2021年（令和3年）12月28日（火）　毎　日　新　聞

特攻隊員見送った母

知覧語り部　写真と「対面」

知覧特攻平和会館（鹿児島県南九州市）で語り部をしている桑代照明さん（65）が27日、毎日新聞大阪本社（大阪市北区）を訪れ、陸軍知覧飛行場で女学生に見送られながら出撃する特攻機の様子を撮影した戦中写真を観覧した。母チノさん（92）は写真枠外の左側に並んでいた女学生の一人で、当時の様子を度々聞いていた。桑代さんは「実物を見て胸につまるものがあった。鹿児島に帰ったら今日の出来事を母に伝えたい」と話した。

写真は毎日新聞大阪本社に残る膨大な戦中写真の一枚。横9㌢、縦6㌢のモノクロ写真で、スクラップブック（写真台帳）にはり付けられた状態で保管されていた。1945年4月12日に写真部員が特攻基地だった知覧飛行場で撮影したもので、出撃する特攻機を前に知覧高等女学校の生徒らが桜の枝を持って見送る姿が収められている。同月17日付の毎日新聞大阪本社版朝刊に掲載され、同館では特攻の史実を象徴する写真として開館以来、館内に展示されてきた。現在は、写真が撮影された日に書かれた生徒の日記と一緒にパネルで紹介されている。

桑代さんは、写真を前にして、目を赤らめた。桑代さんによると、チノさんら女学生は、特攻隊員らの宿舎を拠点に裁縫や洗濯などの奉仕作業に携わり、この日は、数十人が八重桜の枝を手に隊員を見送った。母は自分からは話したがらないが、当時の経験を尋ねると「隊員は自分たちを守ってくれる生きた神様に見えた」と振り返ったという。

桑代さんは修学旅行生や来館者らに語り部として話す際は毎回写真について触れるといい、「写真があってこそ伝えられることがある。戦争を繰り返さないために記憶を語り継いでいきたい」と話した。

同行した同館学芸員の坂元恒太さん（44）は写真について「地域の人たちが特攻隊とどのように関わってきたのか伝える資料として重要」といい、「写真にまつわる背景を調べ、記録し、伝承していきたい」と話した。【宮川佐知子】

毎日新聞大阪本社に保存された資料写真を前に目頭を熱くする知覧特攻平和会館の語り部・桑代照明さん（右）と、調査にあたる坂元恒太・同館学芸員＝同本社で27日、金子裕次郎撮影

女学生に見送られて出撃する特攻機の様子を撮影した写真＝鹿児島県・知覧基地で1945（昭和20）年４月

図４　2021年12月28日付毎日新聞記事（毎日新聞社提供）

脱稿後，早川弘特派員の写真等を早川巖氏より御提供いただきました。特攻を見送る写真を，女学生の後方から撮影したカメラマンに関する歴史資料として，ここに掲載します。

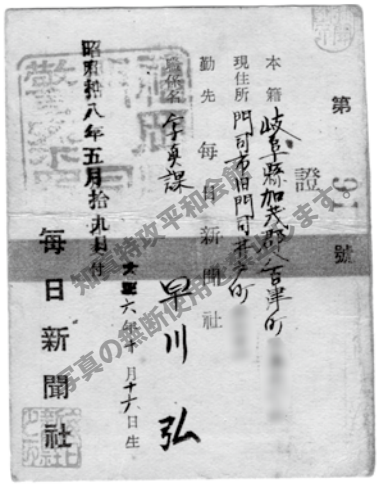

写真11 取材許可証·表面
（早川巖氏提供）

写真12　取材許可証・裏面　8.2㎝×6.3㎝
（早川巖氏提供）

※番地は伏せ字にしています。

＜要約＞

筆者は、昭和20（1945）年４月17日付け毎日新聞に掲載された、特攻を見送る写真の原本調査を行った。今回の調査では、毎日新聞社の全面的な協力により、毎日新聞社大阪本社に保管されている当時の写真原本や、そのネガフィルムを閲覧させていただくことができた。

新聞に掲載された写真の原本(紙焼き写真)は、スクラップ帳に貼られた状態で保管されていた。これは、戦時中に毎日新聞社大阪本社の写真部で整理されて保管されたものである。スクラップ帳に貼られた紙焼き写真のネガフォルムも存在していたが、それはオリジナルネガではなく、オリジナルネガから現像された紙焼き写真を、カメラで撮影して複写した写真のネガであることがわかった。

さらに、撮影者の「早川特派員」の御子息から話を聞くことができ、撮影当時、門司在住で毎日新聞社西部本社に所属し二十八歳頃であったことを知ることができた。また、これらの調査の過程で、知覧特攻平和会館に展示されている額縁に入った写真は、もともとは知覧町長室の壁に掲げられていたものである可能性が高いことに気がついた。

〈Summary〉

Investigation of the Primary Source Photographs “Farewells to Kamikaze Pilots”.

I, the author conducted an investigation of the primary source photographs of kamikaze pilots being farewelled, which appeared in the Mainichi Newspaper on April 17, 1945. With the full cooperation of the Mainichi Newspaper, I was able to view the original photographs and negatives stored at the Mainichi Newspaper Head Office in Osaka.

The original photographic paper printed photograph that appeared in the newspaper was kept in a scrapbook. It was catalogued and stored at the photography department of the Mainichi Newspaper’s Head Office in Osaka during the war. Upon further examination of the negatives present, they turned out to be the negatives developed from photographs taken of the original of photographs i.e. copies made of the originals by photographing them with a camera.

I was also able to speak with the son of the photographer, Special Correspondent Hayakawa, and learned that his father was 28 years old at the time when he took the photo. He was a Moji City resident and worked for the Western Headquarters of the Mainichi Newspaper.

In the course of these investigations, I also realized that the framed photograph displayed in the Chiran Peace Museum was most likely originally hung on the wall of the Chiran Mayor’s office.